

《論
說》

《書物に殉じた鈍牛》——トマス・アクィナスの思想世界

Vita brevis, scripta manent.

柴 田 平 三 郎

序

西欧中世を代表する神学者にして哲学者トマス・アクィナス(Thomas Aquinas, 1225-1274)について、いまさら何を語ることがあるのか。そのけっして長くはない生涯、それに比しての信じ難き膨大な仕事量と内実、そしてその影響のいまにいたる広がり大きさ等などに関してものされた書物には事欠きはしない。⁽¹⁾

筆者がこれから取り組もうとしているのはそんなトマスの巨大な思想体系のなかの、ほんの一部、すなわちその社会・政治思想に関してだ。これなら少しは独自の発言ができるかもしれない。稿を改めて触れるつもりだが、この政治思想史のなかではトマス思想の全貌はまだすっかり明らかにされたとは言い難い。⁽²⁾

トマスの社会・政治思想に入る準備段階の一つとして、まずは彼が西欧十三世紀当時の知的世界にあっていかなる生の形を示したか、その問題からはじめることにする。

一 黙り牛 (Dios mutus)

聖トマスは大きくて重い牛のような人物であった。太って悠然として、物静かで、非常に穏やかで、太っ腹であるのに、非常に社交的というわけでもなく、聖なる謙遜とは別に内気であり、時々訪れるけれども注意深く秘めていた脱魂・恍惚の状態とは無関係にぼんやりしていた。聖フランチェスコは火のように激しく、せかせかした人柄でもあったので、突然彼が姿を現わせば、そこにいあわせた聖職者たちは彼を狂人だと考えた。聖トマスは非常にのろまであったので、彼が規則正しく出席した学校の生徒たちは彼をうす馬鹿と考えた。こういう人物はままいるものだが、自分より活発で元氣盛んなうす馬鹿どもに自分の夢を邪魔されるよりは、自らうす馬鹿と思われていたほうがはるかにいいと考えるたちの生徒だったのである。この外面的コントラストは二人の人柄のほとんどすべての点にまで及ぶのである。情熱的で詩を愛しながら、書物にどちらかといって信用を置かなかったのは、聖フランチェスコの逆説だった。聖トマスに関する顕著な事実を言えば、書物を愛し、書物によって生き、また、この世が与えるどんな富よりもアリストテレスとその哲学に関する百冊の書物のほうをのぞんだ『カンタベリー物語』中の、オックスフォードで聖職修行中の学生そのまの生活を送ったのである。神に対して何を最も感謝するかと問われた時、彼はただ、「今まで読んだ書物のすべてのページを理解できたことです」と答えたのである。⁽³⁾

右に挙げたのは独特の逆説と諧謔をもって知られるイギリスの作家 G・K・チェスタトンによる「聖トマス・ア

クィナス伝」（一九三三年）の一説である。見ての通り、ここではトマスは十三世紀を代表するもう一人の人物フランシスコ会の創始者アジジのフランシスコ（1181/82-1226）との比較において取り上げられている。

この両者の比較の視点には考えてみると、それなりの問題があるが、いまは問うまい。⁽⁴⁾それに、両者が十分に比較の対象となりうる、十三世紀を彩る枢要な人物であることはチェスタトンよりも後輩の同じイギリスの中世史家D・ノウルズが「黄金時代（十三世紀）の四人の代表的人物」としてフランシスコ、フランス王・聖ルイ、トマス・アキナス、ダンテ・アリギエーリを挙げて論じている点からも首肯できよう。⁽⁵⁾

多くの識者が認めていることだが、チェスタトンのトマス伝はまことに示唆に富むもので、読む者に豊かな想像力を喚起させる力をもっている。「聖トマス・アキナスの研究にすでに二、三十年を費やしており、たぶんこの主題について二、三の書物を公にしたことのある少数の読者ならば、必ずやチェスタトンのいわゆる『機知』の前に自分たちの学識の面目が丸つぶれにされていることに気づくであらう。⁽⁶⁾」とはフランスの中世哲学史家E・ジルソンの言だ。この評価は現在にいたるも、揺らぐことはない。

確かに、チェスタトンの筆になるトマスの像は、これといって劇的なエピソードに乏しいとされている彼の実像を鮮やかに蘇らせる力をもっている。わけても注目されるのは何と言っても、その巨体についての描写である。これは、今日よく目にするトマスの肖像画、例えばフラ・アンジェリコやサンドロ・ボッティチェリ、あるいはガンのユストゥスらによって描かれたその姿が一樣に肥満体であるのに見事に対応している。

聖トマス・アキナスの風采とか体格は、実のところ、肖像画が描かれる時代以前のどの人物のよりも再現しやすい。……聖トマスはイタリアで普通であるというよりはむしろ、普通でないイタリア人によくある一種の類

型だった。彼は巨大な体軀で、多くの国の喜劇にユーモラスな姿でよく出てくる、容易に「歩く酒樽」と見まがうようなタイプだったのである。彼はそのことを自分で冗談の種にした。彼が坐れるように食卓が半月形にくりぬかれていたという壮大な誇張は、いらいらしたアウグスティヌス派やアラビア派の徒党ではなく、たぶん彼自身⁽⁷⁾が言い出したのであろう。

チェスタトンはこちらも語っているが、実際、彼に接した同時代人につよい印象を与えたのはその堂々たる巨軀だった。トマスの最も古い伝記作者の一人、グイのベルナルドゥスはこの点をこう記している。

彼の外貌と体格に関して言えば、彼は上背があり、肥満していた。廉直な性格の人に相応しく、姿勢が正しかった。なにごとにつけ中庸を逸脱しない人に似つかわしく、顔の色艶はよく、熟れた小麦色をしていた。頭の鉢は大きく、理性に仕える器官が十分に発達しているのを示していた。髪の毛はいくぶん薄くなっていた。素晴らしい知性に見合うだけの微妙な均整のとれた体つきをしていたが、意志の強さを示す逞しい雄々しさと力強い動作に溢れていた。そして、神の偉大さを信じて疑うことのない魂の力のおかげで、どのような苦痛や危険を前にしてもけっしてひるむようなことはなかった⁽⁸⁾。

何事につけ、一切を美化してしまうくらいのある聖人伝の記述である点が気になるにせよ、トマスの肉体的特徴は彼から七百年もへだたった時点にいるわれわれの目の前にも鮮やかに浮かび上がるといえるものである。ついでながら、上に引用した、「坐れるように食卓が半月形にくりぬかれていた云々」という話は古い伝記にはどこにも出て

こない。おそらくチェスタトンの創作だろうが、巨体の持ち主につきものの、どこことなくユーモラスな感じをトマスが人に与えていたらしいエピソードをグイのベルナルドゥスはわれわれに提供している。それはこういう話である。

あるとき、おそらくボローニャ滞在中（1288）のことであつたと思われるが、その地の修道院の回廊を思索に耽りながら歩いていたらトマスに向かって彼とは知らずに、一人の若い修道士がこう声を掛けた。「これから町に用事があつて出掛けるところだが、誰でもよいから目についた者がいれば、その者を一緒に連れて行ってよろしいという許可を修院長からもらっているののでついてきなさい。」トマスは言われるままに、若い修道士にしたがつて歩きだしたけれど、（たぶん巨体のあまり）その早い歩調についていけず、そのたびごとに文句を言われる有り様だつた。たまたまその様子を見ていた人びとのなかにトマスを知っている人がいて、注意したところ、修道士は驚愕してその非礼を詫びたが、トマスは「修道生活というものはただ従順によってのみ完全なものになるのです。」と答えたというのである。⁽¹⁰⁾

さて、こういう巨体ぶりとともにトマスのもう一つの基本特徴として、チェスタトンはその寡黙さとそれにとともに書物への尋常ならざる耽溺ともいふべき傾向を指摘している。チェスタトンの言うところをもう少し引用してみよう。

講義室に群がる学生の中に、背が高く太っているという点で目立っている——その他の点で彼は完全に目立ちえなかつたし、目立とうともしなかつた——ひとりの学生がいた。彼は討論の時も黙りこくっていたので、彼の仲間たちは、沈黙という語のアメリカ風の意味にそれを解釈しはじめた。というのはアメリカでは沈黙は頭が

悪いということと同義語だからである。明らかに、彼の堂々たる体格さえも、最下級のクラスで一番できない大きな子供の不名誉な図体の大きさと同じに見え始めたのである。彼は「黙り牛」と呼ばれた。彼は単に嘲笑の対象であったばかりか、同情の対象にもなり始めた。ひとりの善良な学生が彼をたいそう憐れみ、書き板の上で、初歩的な論理学のイロハのおさらいをして彼の勉強を助けてやろうとした。低能児のほうは、人を感動させるような丁寧さで感謝の意を述べた。博愛主義者のほうはすいすいとおさらいをしてみせたが、ついにあぶなっかしい箇所につかかってしまった。実のところ、その箇所に関して彼は間違っていたのである。すると、どこから見ても迷惑そうで当惑していたこの低能児が、それらしい解答をひとつ出してきた。それは正しく正解だった。この親切な学生は怪物でも見るように、この無知と知性の神秘的な塊に対して、目を見張ったのである。やがて奇妙なひそひそ話が学校中に伝わり始めた。⁽¹¹⁾

この挿話にももちろん、トマスの直弟子でもっとも古いトマス伝を遺したトッコのギレルムスの証言をはじめとして、十分な史料裏付けが存在する。⁽¹²⁾「黙り牛」(bos mutus)というあだ名をトマスがつけられたのはケルンでの修学時代(1248-52)のときのことだった。このケルン時代はトマスが家族の反対からようやく解放されて、念願のドミニコ会に入会し、師アルベルトゥス・マグヌスのもとで本格的な神学の勉強を開始した時期である。この期に学友たちから、からかい半分につけられたあだ名ほどトマスの実像をよく伝えるものはなからう。当時既に人並みはずれて巨大な体躯の持ち主でありながら、すべてにおいて物静かで目立たぬ存在であったトマスの才能を鋭く見抜き、アルベルトゥス・マグヌスはこう語ったと、伝記作者グイのベルナルドゥスは書き残している。

われわれはこの若者を黙り牛（bos mutus）などと呼んでいるが、諸君に言っておく、やがて世界は彼の鳴き声で満たされることだろう。⁽¹³⁾

ただここで余計なことを言えば、この話はトマスの生涯を語る場合、まず間違ひなく触れられるほどに有名なのだが、研究者のなかにはケルン時代にトマスが「黙り牛」と呼ばれていた点について真偽のほどはわからないとするむきもある。たとえば、現在のトマス研究においてもっとも定評のあるトマス伝を書いているヴァイスハイブルはそういう立場をとっているが、その彼も「もしそう言われていたとするなら、黙り牛というこの言葉はトマスの二つのよく知られた特徴、つまり彼の巨体と、青年期より培われてきた無口という二つの特徴を如実に示すものだ。」⁽¹⁴⁾と述べている。穏当な指摘であろう。

「黙り牛」——つくづくよくつけられたあだ名だと思わずにはいられない。チェスタトンがアメリカのカールチャーでは「沈黙は頭が悪いということと同義語」で、トマスにこのあだ名をつけた当時の学生たちはそういうアメリカ風の意味でトマスを揶揄したのだ、と言う。いかにもイギリス人らしいアメリカ観が窺われて、それはそれで面白いのだが、見落としてならないのはやがてこの嘲弄が愛すべき敬意へと変わっていったという点である。ほとんどのトマス伝に一樣に言えることだが、トマスの人柄は物静か、謙遜、悠然、穏和、鷹揚、快活、従順、忍耐強さ、情愛といった形容語で示される。これは伝記作者たちのつまらぬ阿り^{おもね}ではけっしてありえない。そのことはトマスの晩年、彼の最強の論敵であり、そのアリストテレス解釈をめぐって激越な攻撃を彼に仕掛けたフランシスコ会のジョン・ペッカム（のちカンタベリ大司教）でさえ、トマスからの反論が「偉大なる恩情と謙遜を以て」⁽¹⁵⁾のものであったと述懐している事実からも領けることだ。

要するに、トマスの寡黙とは上に列挙した数々の形容語を含んだ、その類い稀なる思慮の深さ、底知れぬ思索の広がり示すものだと思う。そしてそれら一切をうちに包み込んでいるのがまさに人並みはずれた、堂々たる彼の体格だったのではないだろうか。

そう言えば、西欧文化においては、雄牛 (bos : ox : bullock) とは「力」と「忍耐」、「従順」と「謙遜」を意味するシンボルであることを思い出さずにはいられない⁽¹⁶⁾。『旧約聖書』では子羊とともに、生き贄の動物として記され、ユダヤ民族の表象でもあるが、ローマ人は牛の頭を労働と忍耐の表象として建物に飾ったといわれる。畑で農耕に携わる雄牛の姿は、主人への服従であり、他の人びとへの奉仕を意味する。あるいはまた、古代では自然の生産力や豊饒、肥沃、多産を意味したともいわれる。総じて父親、天、太陽などとむすびつく動物とされ、ゼウスが乙女エウロペーに恋したとき、白い雄牛の姿となって彼女に近づき、背中に乗せて世界を廻った話はあまりにも有名だ。

いささか強引に解釈すれば、イタリアのナポリ近郊で生まれ、ナポリの大学で学び、ついでドイツのケルンの大学で勉学し、フランスのパリ大学で教鞭をとったのち、再びイタリアに戻り、主としてオルヴィエト、ローマ、ヴィテルボに滞在し、またパリに引き返し、イタリアに帰り、フィレンツェ、ナポリで過ごし、フランスのリヨンで開催される公会議に出席する旅の途上、生まれ故郷近くのフォッサノヴァの修道院で息をひきとったトマスの生の軌跡は、エウロペー(ヨーロッパ)を背中に乗せて歩き回ったゼウスのような気がしないでもない(事実、徒歩でというのが当時の修道士の旅行の原則だった)。が、それはともかくとして、五十年に満たないその生涯のすべてを修道生活に捧げ尽くし、神学と哲学の探求以外には目もくれなかったトマスの一生がこのような「力」と「忍耐」、「従順」と「謙遜」のそれであったことはほとんどのトマス伝が物語るところである。しかも忘れずにつけく

わえねばならないが、『神学大全』をはじめとする彼の膨大な著作群が如実に示すように、その生涯はまことに「豊饒」、「肥沃」、「多産」だった。こうして、雄牛のシンボルが世界に明示するものを体現しているという意味において、間違いなくトマスは「黙り牛」にほかならないのである。

二 『学習法に関する訓戒の手紙』

トマス・アクィナスにふつう、『兄弟ヨハネスへの学習法に関する訓戒の手紙』(*Epistola exhortatoria de modo studendi ad fratrem Johannem*)と題された書簡体の文章がある⁽¹⁷⁾。

いつ頃書かれたものか、は確定していない。また、本来にトマスの筆になるものか、に關しても、研究者の間には依然としてそれを疑問視するむきもある。だが、今日ではほぼトマスのものに間違いのないというのが趨勢となっている⁽¹⁸⁾。同じドミニコ会に属する若い神学生から寄せられた、学問の習得方法についての質問に答えているところからみると、おそらくトマスの、神学教授としての評判が確立した以降に著されたものであろう。それはともかく、この手紙が注目に値するのは、そこに学問と生活に対するトマス自身の考え方が行間から窺えるからである。このことは自己についてほとんど語ることのなかった彼にしては珍しい。まずはその全文を引用してみる。

キリストにおいて至愛なるヨハネス、あなたは、知識の宝庫を手に入れるにはどのように学習しなければなら
ないかと、私に尋ねてきました。それで私はあなたに次のような助言を与えたいと思います。

- (1) あなたは、大海にただちに乗り入れるのではなく、小川を通ってから入ることを選ぶようにしてください。それは困難なことへは容易なことを通じて至るのが当然だからです。
- (2) したがって次のことが私の忠告、またあなた自身の教訓です。私はあなたに命じます。語るに遅く、また談話室に行くにも遅くあること。
- (3) 良心の潔白を大切にする事。
- (4) 祈りに努めることをやめないこと。
- (5) 「知恵の」葡萄酒の貯蔵庫へ導かれようと思うなら、常々修室を愛すること。
- (6) すべての人に愛すべき者として自分自身を示すこと。
- (7) 他人の行いはなにごとくもけっして詮索しないこと。
- (8) 誰にもなれなれしくしないこと。なぜなら過度の親密は輕蔑を生んだり、学習を遠ざける材料を提供するからです。
- (9) 世間の人の言葉や行いには、けっして介入しないこと。
- (10) 出歩くことは何にもまして避けること。
- (11) 聖人方や善き人々の行跡を模倣することを忘れないこと。
- (12) 誰から聞いたかには心を用いず、語られた良き事柄は、すべて記憶にとどめること。
- (13) 読み、聞く事柄を理解するよう努めること。
- (14) 疑問は、自ら解き明かすこと。
- (15) あなたにあたる事柄はすべて、器を満たすことを熱望する者のように、精神の武器庫に収納するよう努めること。
- (16) 高度に過ぎることを求めないこと。

以上の道標に従うとき、あなたは、生きている限り、万軍の主の葡萄酒で有益な葉や実を生じさせ、結実させるに至ります。もし以上の道標に従ってたえず歩み続けるならば、あなたは熱望するものへ到達することができるようになります。

見ての通り、ここには実り豊かな勉強を可能とさせるために守るべき十六の規則が列挙されている。我が国でこれが最初に紹介されたのは戦前のことで、M・グラープマン『聖トマス・アクィナス』（高桑純夫訳、一九三四年）のなかでなされている候文で訳された引用を通してであらう。⁽¹⁹⁾その後、P・ネメシエギ神父が「トマス神学の思想的地位」と題する論稿（一九七五年）を発表され、そのなかで平易な現代語訳をおこなっている。⁽²⁰⁾しかもそれは詳細な解説がほどこされ、トマスの勉強精神の長所と短所が窺えたとされている。ネメシエギ神父の指摘はまことに鋭く、傾聴に値するもので、やがて山内晴海神父も自著のなかでネメシエギ訳を全面的に引用しつつ、ネメシエギ神父の指摘するトマスの五つの長所と三つの短所についての自己の評価を披瀝されている。⁽²¹⁾これら八つの特徴の指摘は無視し得ない。そこでこれを手掛かりとして、トマスの勉強精神に見られる問題点を考えて見たい。そこから、トマス思想を理解する足掛かりが多少は得られるかもしれない。

ネメシエギ神父のいう五つの長所とは、「1」人間全体による真理追究 「2」広汎な資料集め 「3」優れた理解力 「4」節度 「5」教授の任務 ということであり、三つの短所とは、「1」生活体験と想像力の乏しさ 「2」諸思想の多様性、独自性を消す収録 「3」理解力に対する過信 ということである。⁽²²⁾

このうち、長所とされている五点については、とくに問題は感じない。というよりも、ネメシエギ神父の慧眼には、深い同意を覚えずにはいられない。

まず、「1」トマスにあつては正しい勉強の仕方についての問いに対する回答がたんに勉強そのものの仕方についての勧告ではなく、生活全体の正しい営み方に関する勧告となっている。トマスの生涯そのものが示しているが、「彼の学問は、学問のための学問ではない。彼の学問のすべては、実存にかかわりがあつて、そこから湧き出た

もの」だ。

〔2〕 中世の学問は權威ある書物——聖書、教父の文獻のほかに、ギリシア、アラビア、ユダヤの文獻——をもとにし、その理解と解釈に努める学問で、そのために広汎な資料集めが説かれている。

だが、〔3〕 単に資料を多く収集すれば足りるというのではなく、「読み、聞く事柄を理解するように努めること」(13)が必要で、そのためには疑問を放置することなく、納得するまで追求しなければならない。確かな知識の獲得は十三世紀の思想的状況によく合致しており、神の知性の光にあずかっている人間知性への信頼から、トマスは權威をただ盲信するのではなく、「事柄そのものの姿を知ろう」とする。危険視されたアリストテレスに対する彼の理解の態度もそこから出てくる。相反する命題を出し尽くした上で自説を展開するアベラールの方法を踏襲しているのも同じことである。

〔4〕 「高度に過ぎることを求めないこと」(16)の勧告が示すように、人間の認識の限界も弁えている。主意主義者ボナヴェントゥラに対して主知主義者といわれるトマスだが、彼は同時に「どの哲学者も一匹の蠅の本質さえも完全に探求し尽くすことができないほどに、われわれの認識は弱い。」(*In symbol. apost.*)と言う。だが、それでいて学問への挫折感や懷疑主義とも無縁である。「大海にただちに乗り入れるのではなく、小川を通じてから入ること」(1)という言葉は人間理性への信頼を示すものだ。

〔5〕 神学生ヨハネスにわざわざ時間を割いて手紙を書いている事実のうちに、トマスがたんに研究室に閉じこもって学問を追求する人間ではなく、根っからの教育者だったことが窺われる。これはフランシスコ会、ドミニコ会双方に共通する伝統で、瞑想し理解したことを宣教(説教)すること、トマスの場合、それを教授することが重要だった。ここに中世における教会立、大学における神学教授トマスの本質がある。

さて、ここにおいて熟考に値するのは、むしろネメシエギ神父の挙げている三点の短所のほうである。

まず「1」生活経験と想像力の乏しさ ということについて。トマスが神学生ヨハネスに修道院以外にあらちらと旅行したり（10）、世間の人びとの言葉や行いに干渉したり、（9）、談話室に行ったりすることを避けるよう勧告している（2）のは、勉学に専念する学生には適切な勧めだったかもしれないが、トマス自身の生活体験の限界を暗に示すものだ、と神父は言う。そしてこう続ける。

「トマスは南イタリアの公爵の息子で、五歳のときからベネディクト会のモンテカッシーノ修道院で育てられ、一九歳のときドミニコ会に入会し、それから一生涯大学の教授、あるいは教皇庁付きの神学顧問の務めを果たした。彼は肉体労働をした経験もなく、司牧活動を通して庶民に接触することもなかった。一般大衆に対して、子供のときに習った方言で説教することがあったが、目を閉じたままで説教していたと言われていた。彼はまたベルナルドゥスのように政治にたずさわったり、ボナヴェントゥラのように修道会の長上の任に就いたりすることもなかった。彼はある時ルイ九世王の宴会に招かれ、そこで黙り込んで瞑想にふけっているかのような姿でただ座しており、遂に突然大きな音をたててテーブルをたたき皆を驚かせ、『この証拠でマニ教徒の説が破れるぞ』と叫んだエピソードは有名である。彼は王の食卓に招かれたことを、人々と話して経験を集めたり、あるいは彼らに影響を及ぼしたりすることに用いることなく、ずっと自分が専念した神学上の問題を考えることだけに費やしたのである。」⁽²³⁾
まことに痛烈で、もっともな批判である。その生涯の軌跡を追ってみればわかるが、幼児から修道院生活と係わりをもってしまったトマスには確かに俗世（「世間」）との接点がなかった。世俗政治にも教会政治にも無縁で、ただひたすら自己の神学の世界に閉じこもっていたことは否定できない。その文脈で、フランス王・聖ルイの食卓に招かれたときの有名な挿話（*Guillelmus de Tocco, Hystoria*, c. 43; *Bernardus Guidonis*, c. 25）——このときトマ

スは『神学大全』の執筆の真つ最中だった——をもちだされれば、それはその通りということになるだろう。

こうした生活経験の乏しさとともに、神父はトマスの想像力の乏しきについても、こう指摘する。

「トマスの書物の中には、自分が住んでいた社会はほとんど現れてこない。彼の想像力は乏しく、詩についてのアリストテレスの低い評価を自分のものにした。彼の書物の中に修辭学的な調子がないことを現代人はかえって喜ぶかもしれないが、叙情的要素が見られないのは遺憾である。聖書を織りなす種々さまざまのたとえ話、象徴、イメージなどというものは、トマスの『神学大全』の中に現れてくる時に、それは押し花のようなものでしかない。……トマスは、特に神学においては、はっきり定義された概念の理性的な明瞭さよりも、場合によって、たとえ話、詩、象徴などというものが、より深い認識への道だということを、夢にも考えなかったのである。広々とした自然界、また人間の世界、そして信仰の世界も多彩な豊かな絵のようなものであるが、トマスはその大きな絵の輪郭を黒インクで白紙に書いているようなことをしているのである。そのような精確な輪郭を画く試みにももちろん大きな意味があると思うが、もしそれがキリスト教信仰を説くべき聖職者の教育の際キリスト教の唯一の妥当な説明として教えられるならば、また、もしそれが聖書の思维方法などよりも的確に神の啓示、キリストの教えなどを表しているものとして、要理教育書などの構成の模範とみなされるならば、それは大きな弊害を招くであろう。教会の歴史を見ると、このような弊害がしばしば起こったと言わざるを得ない。⁽²⁴⁾」

この点に関しては、どうだろうか。もしわれわれがトマスとは一体どのような人物であるかを知りたく思い、彼自身の生々しい肉声をなにか適当な著作、たとえば『神学大全』のなかに直接聞きたいと望んで繙いたとしても、結果はただ失望するだけであろう。トマスには、アウグスティヌスとはちがって、自己の体験を赤裸々に吐露してみせた『告白』のごとき作品は存在しない。まして、「叙情的要素」だの、「修辭学的な調子」といったものはじ

めから彼の書物には望むべきもないのである。「たとえ話、象徴、イメージ」などが表れてくるとしても、「押し花のようなものではない。」とはその通りであろう。そしてその限りでいえば、「想像力の乏しさ」は否めないかもしれない。

だが、問題はその先にある。ネメシエギ神父は、トマスがその神学において「はつきり定義された概念の理性的な明瞭さよりも、たとえ話、詩、象徴などというものがより深い認識への道だということを、夢にも考えなかった」と断じている。そしてまた、トマスは「その大きな絵の輪郭を黒インクで白紙に書いているようなことをしている。」とも言い、その限界を指摘している。この場合、神父のトマスに対する批判の眼目はどこにあるのだろうか。つづめて言えば、それはいま見たようなトマスの方法——「精確な輪郭を画く試み」——には一定の意味が十分にあるとはいえ、それがキリスト教理解の「唯一の妥当な説明」、「要理教育書などの構成の模範」とされたならば、「大きな弊害」を招くし、事実、教会史においてそういう弊害が起こったのだ、という点にあるのであろう。

しかし、どうだろうか。ここでいう「大きな弊害」をトマス自身に負わせるのは、いささか酷というものではないだろうか。トマスのうちに、ある種の「想像力の乏しさ」があることを認めないわけにはいかないとしても、そしてそこから感性に基づく具体的な説明や説得よりも抽象的な論証への偏重が指摘できるとしても、そうした批判はさしあたり、あくまでもトマスの問題として考えるべきであり、トマス以後の教会史が惹起させた「弊害」までもトマスの責任に帰するのは論理の飛躍にならないだろうか。

そればかりではない。そもそも事物の論証をあくまでも客観的、抽象的に行い、そこに生々しい生の感情を持ち込むのを拒否するのはトマスばかりではなく、一般に十三世紀スコラ学の特徴でもあったのである。ここで思い出すのは、十二世紀の人文主義と十三世紀のスコラ学の性格上の相違について示したD・ノウルズの見解である。⁽²⁵⁾ 彼

はベトルス・ダミアヌス、アンセルムス、アベラルドゥス、クレルヴォーのベルナルドゥス、マームズベリのウィリアムス、尊者ベトルス、ソールズベリのジョンといった十二世紀の人文主義者たちの間に、(1)文法の修得とラテン作家の作品への読解に裏付けられた自己表現力豊かな文芸文化(2)古代の賢者に対する個人的な敬意の念(3)そうした感性と志向をもった者たち同士の間で成立する友愛に満ちた人間関係 が存在したと指摘し、こう述べている。

「聖トマスの過去の師たちに対する態度は、アベラルドゥスやエルレドゥスのそれとはまったく異なっている。それはまたエラスムスやモアのそれとも異なっているが。〔十二世紀の〕人文主義者たちはギリシアやローマの時代とは非常に違った時代に生きてはいたが、古代人の生活や感情を詮索し、彼らの表現様式を模倣し、彼らの思想の中心部に時間をかけ、共感を寄せながら到達しようとしている。これに対し、〔十三世紀の〕スコラ学者たちも過去を深く尊重しないわけではない。しかし、彼らが吸収しようとするのは、思想の外側の、眼に見える構造であり、純粹に知的な、impersonal な要素である。その影響力に身を委ねるところか、彼らはまったく新しい哲学体系に、まったく異なった世界観にそれを奉仕させることに躊躇しない。スコラ学者たちにとって、アリステレスやアウグスティヌスの人格、感情、生活の移り変わりは、なにものをも意味しない。その思想の骨組み⁽²⁶⁾だけがすべてである。」

ノウルズの物言いには、容易に感得できるところだが、十二世紀の瑞々しい感性の逆りを示す人文主義に対する深い共感がある。だが、その点をさしあたり括弧に入れて読めば、ここに示されている十二世紀の知的文化と十三世紀のそれとの比較は大変に示唆深く、的確だとも言える。同じようことはまた、J・ホイジンガによっても提供される。彼は十二世紀の人文主義者ソールズベリのジョンに関する講演のなかで、ジョンに代表される精神を「前ゴ

シック」と形容し、その特徴は「今や消えなるとする文化と精神傾向を示す、いわば偽近代の特徴」⁽²⁷⁾だと指摘した上で、次のように語っている。

「これら「十二世紀の」知識人の言語や、思想が翼をのばして誰はばかることなく羽搏いていたはずの自由の世界は、まもなくスコラ学の領域に閉じ込められ、三段論法にしばられて、ドグマ的公式に立つ哲学的見解に押し込められてしまうのです。まだ初期の頃は世界も思想もトマス・アクィナスやボナヴェントゥラの確固たる不動の体系の中に閉じ込められてはいませんでした。世界の姿、生活と精神の形式はまだゴシック様式の中に、結晶化してはいませんでした。」⁽²⁸⁾

ここでトマス・アクィナスやボナヴェントゥラの名が出てくるが、彼らに代表される十三世紀のスコラ学の世界とは、文法学重視で古典の味読と言語表現に心を砕く十二世紀の人文主義とは決定的に異なっており、「三段論法」、「ドグマ的公式に立つ哲学的見解」、「不動の体系」をその特徴とするとされている。ここにも、十三世紀スコラ学に対するいくぶんかマイナスのニュアンスが示されているが、イギリスの中世史家R・W・サザーンに言わせると、そうした評価は逆転する。⁽²⁹⁾彼によれば、修道院付属学校で営まれる文法と修辭学を柱とする十二世紀の古典研究は、十三世紀に入ると新しい都市文化のなかで日々の多忙な生活を送るアクティブな人びとの関心を惹きつける力を喪っていき、それに代わって新しい状況に対応する新しい知の磁場、つまり大学における論理と実証に重きをおく論理学研究が時代の潮流となっていたのであり、いわばその傾向は必然だとされる。そして、こういう基本的精神転換を彼は「修辭から論理へ」という標語で形容していることはよく知られているところである。

さて、このように見てくると、ネメシエギ神父が「大きな絵の輪郭を黒インクで白紙に書いているようなこと」、あるいは「精確な輪郭を画く試み」と表現したトマスの特徴ははたして「短所」として扱われるだけでよいのか、

という疑問が生じるのではないだろうか。否むしろ、それこそがまさにトマス著しい特徴なのだと受け止め、そのような特徴をその背後の時代の枠組みのなかで考えていくことを通じてはじめて、ほかならぬトマス思想の実像に近づけるのではないか、と思うのだが、どうだろうか。そして、そう考えたとき、D・ノウルズの上述の言葉がある見逃せない側面として浮かび上がってくる気がする。すなわち、十三世紀のスコラ学者たちが古代思想家を吸収しようとする場合、それは「思想の外側の、眼に見える構造、純粹に知的な、impersonalな要素」であり、彼らは「まったく新しい哲学体系に、まったく異なった世界観にそれを奉仕させ」ようとしたのであって、「アリストテレスやアウグスティヌスの人格、感情、生活の移り変わりは、なにものをも意味しない。その思想の骨組み^{スケルトン}だけがすべてである。」という言葉であるが、この言葉はネメシエギ神父の指摘するトマスの二番目の「短所」(「2」諸思想の多様性、独自性を消す収録)についても、再考を促すように思うのである。そこでまた、神父の指摘を引用してみる。

「トマスが神学生ヨハネスに、容器いっぱいにした人のように、できるだけ多くのものを心の蔵の中に収めるように勧告しているが、時間的にも空間的にも大きく隔たった時代や場所で書かれた書物に現れている思想を集め整えることの困難さに彼は十分に気づかなかったようである。すべての人間の知性の同質性に関する彼の強い確信のゆえに、各思维方法の独自性に対する認識は、不十分になったのではないかと思われる。トマスは当時の習慣に従って、アウグスティヌスなどの教父たちの考えを、中世の教会の考えや自分の思想体系に合わせて解釈しようと努めているが、そのように解釈されたアウグスティヌス思想は、そのもとの価値の大部分を失ってしまうのである。抜粋に頼った時代であった中世、人間実存の歴史性について十分な理解を持っていなかった中世の人として、そのような欠点はトマスにとって避け難いことであつたらう。いずれにしても、トマスの体系において多くの思想

が合流しているということの結果、その一つ一つの思想の本来のユニークな価値が、ニュートライズされたことを否むことはできない。福音書の魅力的な素朴さ、パウロの焰、アウグスティヌスの旋風、ディオニュシオスの神秘的な闇などをトマスの著作の中に探してみてもむだである。トマス自身の思想に関して、このような限界を指摘することは、批判よりも、各人間の思想に当然限界があるという指摘にすぎないが、トマス以後のカトリック教会がたびたびトマスという鏡の中に写した限りにおいてのみ他の諸思想をながめたということは、キリスト教思想の豊かな多様性を長い間忘れさせたのである。⁽³⁰⁾

ここでもまた、トマス以後のカトリック教会がトマスを絶対視したことについての痛烈な批判がなされているが、当面の関心は前段である。「時間的にも空間的にも大きく隔たった時代や場所で書かれた書物に現れている思想を集め整えることの困難さに彼は十分気づかなかったようである。」というのだが、そう言いきれぬのだろうか。この点はトマスの「長所」(「2」「広汎な資料集め」として挙げられていることと若干矛盾するように思われるが、それよりも強調点は次の「すべての人間の知性の同質性に関する彼の強い確信のゆえに各思维方法の独自性に対する認識は、不十分になったのではないか、と思われる。」という点にあるのであろう。だが、そうだとすると、「知性の単一性」をめぐるトマスがそれを唱えるアヴェロエス派と激しい論争を交わした事実なども想起され、ことはそう単純に言いきれないように思う。しかし、ここでの強調点はそのもっと先にあるようだ。すなわち、トマスがさまざまなに集めてきた先人の説を「当時の習慣に従って」、「中世の教会の教えや自分の思想体系に合わせて解釈しよう」と努めている「結果」、「そのように解釈された」先人の思想は「そのもとの価値の大部分を失ってしまう」ということ、そして「トマスの体系において多くの思想が合流している」ということの結果、その一つ一つの思想の本来のユニークな価値が、ニュートライズされたことを否むことはできない。」という点である。

もっともな指摘である。それを十分に認めた上であえて誤解を恐れずに言うのだが、こういうことはそもそもなかなか一つの体系を構築しようとする場合には致し方のない必然なのではないだろうか。いつの時代も、人はまったくの真空のなかで思索し、その思想を作り上げるのではないだろう。ましてトマスの時代には、真理の独占を誇ってやまない教会の権威が厳然と存在していた。トマスが思索をしていたのはそうした情況のなかであつたのだが、シュヌーの言うように、先人の思想に問いかけるとき、トマスの視点は「かつてのギリシアやローマでの情況はいかなるものであつたか、と問うているというよりはむしろ、かりに十三世紀に生まれてきたのであれば、彼らはどうのような貢献をもたらすことができるか、⁽³¹⁾」ということにあつたのである。「哲学的思索の目的というものは、人びとが今日にいたるまでに、どのようなことを考えてきたか、を知ることではなく、真理とは何か、ということなのである。」(*In libr. I de Coelo I. 22.*)というのがトマス自身の語るところである。

こうしてみると、ネメシエギ神父の指摘する「諸思想の多様性、独自性を消す収録」という「短所」が確かにトマスに見られるのを認めざるをえない一方で、と同時に、こうした「短所」をやむを得ないものとさせるほどにトマスは貪欲に先行する諸思想を吸収し、それらを自己の体系のなかに消化させていった思想家だつたということを認識しておくのがトマス理解の基本だという気がする。ここでまた思い起こされるのはA・パノフスキーが『ゴシック建築とスコラ学』(一九五一年)においてみごとに分析した、ゴシック建築とスコラ学との深い親和性と類似性ということである。⁽³²⁾いうまでもなく、トマスの生きた十三世紀は西欧世界の各地に高い尖塔とリブ(肋骨)を利用したアーチ型天井をもつゴシック様式の巨大な大聖堂が建てられた時代であるが、「ゴシック建築とスコラ学の間には、時間と場所という純粋に事実の領域において、とても偶然とは思えない明白な同時発生が存在している⁽³³⁾」とした上で、パノフスキーはそれをこう断言するのである。

「盛期スコラ学の〈大全〉と同様に、盛期ゴシックの大聖堂は何よりも『全体性』を目指し、それゆえ、削除と総合によって一つの完全で最終的な解決に近づいていった」⁽³⁴⁾。

詳細は同書に譲るほかはないが、要するに、ゴシック建築の構造的特徴とはその骨格における二つの相反する要素、上下の柱の間の垂直的連続性と内部の壁面の水平的方向性との葛藤と対立が実にもごとに調和され総合されている点にある。そしてこの調和と総合の構造は盛期スコラ学のスンマ（大全＝総合的体系）と対応しているのである。それはその典型例としてのトマスの『神学大全』をみれば明らかである。ここでは「見かけは和解できないように見えるものを和解させるという技術」、すなわち異教のアリストテレス的論理学という異質なものを自らの内部に取り込んで同化させる工夫がなされており、それは「芸術と言えるほどに完成された技術」⁽³⁶⁾である。つまり、それぞれの論題がまず「問題」(quaestio)として定式化される。その論議においては、初めに一組の権威が提示される（「以下のように思われる。videtur quod……」）。それに対し、他の権威を持つてきて反論がなされ（「しかしこれとは反対に、sed contra……」）、そして両者を調和させるべく解決が図られる（「以上に答えて、私は次のように言わなければならない。respondeo dicendum……」）。ゴシックの建築家たちが相対立する要素の調和をはかり、壮麗な建築物を実現させた方法は、実にこういうスコラ学の思弁法と同一の構造だった、というのである。

思想の巨大なゴシック建築と言われる『神学大全』の著者であるトマスを読み、理解しようとするとき、この点はやはり看過できないことではないだろうか。彼が十三世紀という時代の空気のおかげでおこなおうとしていたのは、なによりもこのような異質なものの「和解と調和」による「体系」の構築であり、「削除と総合」を通じての「全体性」の実現だったのだ。そして、その点に留意すると、ネメシエギ神父のいう三番目の「短所」〔3〕理解力に対する過信〕についてもさして驚く必要もないかもしれない。

「ヘブル語を全然知らなかったトマス、ギリシア語についてごくわずかな知識しか持ち合わせなかったトマスは、それでも聖書全部を理解できたと考えたのであろうか。また、ギリシア教父たちの書物の翻訳だけを読み、またはその書物からのわずかな抜粋だけを読んで、その教父たちの思想を十分に理解できたと考えたのであろうか。またプラトンの著者の原文を読む機会が全然なかったのに、プラトンの思想をも十分に評価し、それに対する適切な批判を下すことができると思ったのであろうか。彼の著作の調子から判断すると、どうもそうらしい。」⁽³⁷⁾

おそらく、十三世紀当時の学問的情况からすれば、ヘブライ語やギリシア語についての知識をトマスが十分にもっていたとは言い難いこと、利用できる文献もごくごく限定されたものにすぎなかったこと、これらはほぼ間違いないところであろう。だが、それは見方によっては、現在の進んだ学問的水準からはじめて言いうることもかもしれない、トマスはトマスで彼自身の置かれた歴史的条件のなかで、精一杯文献を集め、可能な最大限の努力を振り絞ってそれらを読解していったのではないだろうか。ネメシエギ神父は、トマスがあるとき、自分が神に何をいちばん感謝しているかと聞かれて、「私が生涯に読んだすべての書物をことごとく理解することができたということだ。」(Guillelmus de Tocco, *Hystoria*, c. 39.)と答えたときとされる有名な挿話をもって、トマスの「理解力に対する過信」の一つの証拠としている。だが、これもトマスの浅薄な思ひ上がりというよりも、自己に課された学問的使命へのつよい自覚がおのずと吐露させた発言として受けとめることのほうが自然な感じがするが、どうだろうか。少なくとも、そう考えたほうが五つの「長所」の一つ(「4」節度)として指摘された内実とも符節が合うように思う。

トマスが没したのは一二七四年の三月のことである。五十歳に満たない生涯であった。死の半年前、なにを思ったか、日課の口述もやめ、継続中の『神学大全』の執筆も突然中断してしまふ。個人秘書のピペルノのレギナル

ドゥス（彼が残余の部分を引き継いだ）が「なぜ黙り込んでいらしゃるのですか。」と問うと、トマスは自分の存命中はけっして口外してはならぬと誓約させた上で、「私が見、私に啓示された事柄に比べると、私が今まで書いたものはすべて藁屑のようなものだ。」（*Processus canonizationis*, n. 157）と答えたという。トマスの身に一体、なにが起こったのか、本当のところは誰にもわからない。ネメシエギ神父は、この神秘体験によってトマスは最後に自己の思想を相対化したのだと言い、そのことはトマスの神学体系を唯一のものとして絶対化する後代のトマス派の人びとに対する警鐘となっていると言う。「複雑きわまる人類の思想史の大きな流れの中から価値あるものはことごとく、トマスという一人の人間によって集注され、理解し尽くされ、最終的な秩序を与えられ、一つの完璧な体系にまとめられたというような考えを、彼の思想を絶対化しようとしたトマス派の人たちがもっていたが、それは錯覚である。」³⁸

結

トマスの社会・政治思想に近づくために、まずは当時の世界にあって、彼がどのような身体的印象を人びとの眼に刻印していたのか、という観点からアプローチしてみた。

「黙り牛」というのがその直接の印象である。そこに刻まれているキーワードは二つあって、尋常ならざる寡黙さと人並みはずれた巨体というものである。この二点はトマスという人物の骨格——身体的・精神的——を形成していると思う。

トマスの著作を繙く人が必ずといってよいほど漏らすのが、平易ではあるが、面白みに欠けた、無味乾燥な文体

だということである。読むのに忍耐を要するという人もいる。

だが、そこを我慢して進むと、明らかにするのは、どのような異論、異説もひとたび彼の掌中に収められると、それらがはじめから彼自身の思想構築のために用意されていた材料のように思われることだ。それはちょうど食されるものならば、なんでも食し、豊富な胃液で消化して、それを何度でも反芻することのできる巨牛の姿に似ていない。

体系家トマス、その彼の社会・政治思想を抽出するには、まずもってこういう彼の底知れぬ大きさを実感しておくことが必要だろう。だが、そういう彼は一体、どういう時代に生を受け、どういう空気の中で呼吸をしていたのか、次にこの問題を検討することにする。

(1) トマス関係の文献は、文字通り汗牛充棟である。日本語で読める文献に限れば、さしあたり、稲垣良典『人類の知的遺産 20 トマス・アキナス』講談社、一九七九年。同『トマスⅡアキナス』清水書院、一九九二年のそれぞれ巻末につけられた「文献案内」、「参考文献」が便利である。

(2) この点はトマスの政治思想プロパーに関するモノグラフがきわめて少ないという事情に端的に現れている。これは、欧米でもわが国でもさして変わらない。とくに、わが国では、個々の論文や通史のなかで取り上げられているごくわずかな論稿を除くと、単独の書物はまだ皆無に等しい。R・M・ハッチンス『聖トマス・アキナスと世界国家』（柴田平三郎訳、未来社、一九八四年）ぐらいのものであろう。

(3) G・K・チェスタトン『聖トマス・アキナス』生地竹郎訳『G・K・チェスタトン著作集6 久遠の聖者』春秋社、一九七六年、一八二頁。なお、これには先訳がある。『聖トマス・アキナス』中野記偉訳、中央出版社、一九六九年。

(4) たとえばの話、フランシスコ（フランシスコ会）であれば、同じ托鉢修道会の創設者であるドミニコ（ドミニコ会）を、トマス（ドミニコ会）であれば、同世代の、ライバル関係にあるボナヴェントゥラ（フランシスコ会）をもちだして比較す

るのが自然であらう。だが、次の言葉を引用しておく。トマスとフランシスコの対比に意味のあることがわかるだろう。

「聖トマスと聖フランチェスコの業績には不思議な相似点がある。聖トマスは、ブラバントのスイーガーよりも繊細な心の持主で、アリストテレスの著作の真意に対する確かな洞察力を持っていたから、例えばスイーガーの口から語られると直ちに異端ときこえ、怖るべき自負だと受け取られるような諸見解も、トマスの手にかかると、これがうましく信仰と調和されて表現されるのであった。聖フランチェスコの教説もまた、異端者ビエール・ド・ヴァルドーの説くところと大きくちがってはいなかったのだが、フランチェスコのキリスト教徒としての謙虚さは遥かに正統的であった。彼は、ペテロが羊飼い〔キリスト教徒集団〕から連れ出してきた精神と同じものを、こんどは羊飼いの中に連れ戻したのであった。」（モリス・キーン『ヨーロッパ中世史』橋本八男訳、芸文出版、一九七八年、一二六頁。）

(5) D・ノウルズ『キリスト教史4中世キリスト教の発展』講談社、一九八〇年、一七〇—一七六頁。

(6) G・K・チェスタトン、前掲書（生地訳）のビーター・ミルワード「解題」（三八八—三八九頁）のなかの引用文（W・ワードの言葉）による。

(7) G・K・チェスタトン、前掲書、二九三頁。

(8) Bernardus Guidonis, 35, in K. Foster, ed., *The Life of Saint Thomas Aquinas: Bibliographical documents*, Longmans London, 1959, p. 53.

(9) この点について、稲垣良典氏は「トマスはあまりに肥えていたのでその大きなお腹がおさまるよう丸くくりぬいた食卓についていた、という話はおそらく自分も巨漢であったチェスタトンが流行せた作り話であらう。」と言う（前掲『トマス・アクィナス』清水書院、一四七頁）。ところで、この話がわが国でも知られるようになったのは、おそらく本格的なトマス研究の草分けである上田辰之助氏の著書を通じてであらう。そこにはこうある。「アルベルトスは黙々として内気なイタリヤ青年トマスの学才にひそかに嫉望していた。ゆえに、他の門弟共が彼を嘲笑して『シチリヤのだんまり牛』——トマスは有名な肥大漢であり、後年彼の食卓だけは腹部の触れる部分を特に半月形にくり抜いて着席を容易にしたというゴシップが伝わっている——の綽名を彼につけたとき、アルベルトスは襟を正して『この牛の吼声は他日天下を震撼するであらう』とかついしましめかつ予言したのである」（上田辰之助『トマス・アクィナス』三省堂、一九三四年、一七頁。本書は、いまでは、『上田辰之助著作集2トマス・アクィナス研究』みすず書房、一九八七年に収められている）。上田博士はこ

の話はどこから得たのだろうか。「序にかえて」に、「トマススの伝記で興味深く書かれているのは、G・K・Chesteron, St. Thomas Aquinas, London, 1933. である。」(三省堂版「一五頁」とあるところからみると、チェスタトンから得ているように思われるが、チェスタトンの本が出た翌年(一九三四年)に、早くも上田博士の著書が公刊されている点からいうと、すこし時間的に無理な気がしないでもない。

- (10) Bernardus Guidonis 31, in K. Foster, *op. cit.*, p. 49.
- (11) G・K・チェスタトン、前掲書、二三五—二三六頁。
- (12) Guillemus de Tocco, *Hystoria beati Thomae*, c. 12, in *Fontes Vitae Sancti Thomae Aquinatis*, ed. Prümmer, Toulouse, 1911-34, p. 78.
- (13) Bernardus Guidonis, 10, in K. Foster, *op. cit.*, p. 33.
- (14) J. A. Weisheipl, *Friar Thomas D' Aquino, his Life, Thought and Works*, Basil-Blackwell, Oxford, 1974, p. 44.
- (15) グラープマン『聖トマス・アキィナスその人と思想』高桑純夫訳、長崎出版、一九三四年、四六—四七頁。
- (16) 水之江有一編『シンボル事典』北星堂、一九八五年、三九頁。
- (17) 竹島幸一訳「兄弟ヨハネスへの学習法に関する訓戒の手紙」(『中世思想原典集成 14 トマス・アキィナス』平凡社、一九九三年)、八三—一八三頁。
- (18) この書簡の真正性に関しては、前掲の竹島訳につけられた「解説」(八二—八三頁)に詳しい。なお、ヴァイスハイブルも前掲の著作に付された「著者目録」(A Brief Catalogue of authentic works)のなかで、本書簡について、“probably authentic”として紹介している。J. A. Weisheipl, *op. cit.*, pp. 397-398.
- (19) グラープマン、前掲書、七四—七六頁。
- (20) P・ネメシエギ「トマス神学的思想史的位置」(松本正夫・門脇佳吉・K・リーゼンフーバー編『トマス・アキィナス研究——没後七百年記念論文集』創文社、一九七五年)五—七頁。
- (21) 山内晴海『聖トマス・アキィナス哲学序論』サンパウロ、一九九六年、六五—八三頁。
- (22) P・ネメシエギ、前掲論文、七—十九頁。
- (23) 同、十五—十六頁。

- (24) 同、十六―十七頁。
- (25) D. Knowles, "The Humanism of The Twelfth Century", in *The Historian and Character*, Cambridge at the University Press, 1963, pp. 16-30. なお、ノウルズの所説について詳しくは、拙稿「ソールズベリのジョンにおける『人文主義』の意味」〔獨協法学〕第四三号、一九九六年）を参照されたい。
- (26) *ibid.*, p. 30.
- (27) ホイジנגガ「前ゴシックの人、ソールズベリのジョン」（里見元一郎訳『文化史の課題』東海大学出版会、一九六五年、一二三頁。（のち、『ホイジングガ選集4ルネサンスとリアリズム』河出書房新社、一九七一年に収録。）
- (28) 同、一二三頁。
- (29) R. W. Southern, *Medieval Humanism and Other Studies*, Basil Blackwell, 1970, pp. 29-60. サザーンの所説について
も、前掲の拙稿を参照されたい。
- (30) P・ネメシエギ、前掲論文、一七頁。
- (31) M・D. Chenu, *Introduction à l'étude de Saint Thomas d'Aquin*, J. Vrin, 1954, p. 26.
- (32) アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』前川道郎訳、平凡社、一九八九年。
- (33) 同、七頁。
- (34) 同、六〇頁。
- (35) 同、九一頁。
- (36) 同、九一頁。
- (37) ネメシエギ、前掲論文、一八頁。
- (38) 同、一八頁。